

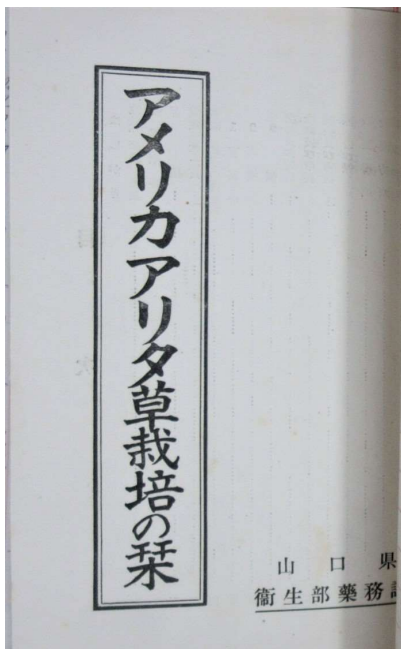
# アメリカアリタ草の栽培

近年、漢方製剤の需要増加に伴い、原料となる生薬の需要も増加しているため、為替相場などの影響を受けない安定的な生薬の確保が求められています。しかし、年間使用量の約8割は中国からの輸入であり、国内産生薬は1割程度であるうえ、生薬の原料となる薬用作物の栽培戸数は減少傾向にあります(令和4年時点で山口県内ではわずか4戸)。こうした現状に加え、中山間地域の活性化という視点からも、薬用作物栽培の増加を図る様々な取組がなされています(農林水産省「薬用作物(生薬)をめぐる事情」令和6年6月、公益財団法人日本特産農産物協会「地域特産作物(工芸作物、薬用作物及び和紙原料等)に関する資料(令和4年産)」令和6年3月)。

ところで、戦後間もない時期の山口県でも、薬用作物の栽培が推奨されていました。今回の小展示では、その薬用作物 = アメリカアリタ草に関する資料を紹介します。

## ①山口県衛生部薬務課「アメリカアリタ草栽培の栞」/昭和28年(1953)

(「薬用植物栽培採集一件綴」県庁戦後A衛生部147)



アメリカアリタ草とは、どのような植物なのでしょう。山口県衛生部が「初心者の手引きとし、また既栽培者の増収の指針」とするため、栽培奨励の経緯や栽培上の注意点などをまとめたこの資料には、次のように書かれています。

北米原産のアカザ科の植物で、畑の雑草「あかざ」と同様な強健な宿根草である。全草が強い臭気を有し、草丈は一・五米にも達し、夏期に穂状花序を頂生又は腋出して、緑白色の小さい花を開いてゆくものである。



▲アメリカアリタ草(資料①p2)

この植物を陰干して蒸留器にかけると、駆虫薬の原料となるヘノポジ油を採取できます。ヘノポジ油に含まれるアスカリドールには、回虫、十二指腸虫、条虫、鞭虫といった人体に影響を及ぼす寄生虫を駆除する効果があり、とりわけ十二指腸虫に有効とされます。ヘノポジ油は、大正2年(1913)にアメリカから輸入されるようになりましたが、大

正 8 年に埼玉県内でアメリカアリタ草の試験栽培が始まり、昭和 25 年時点では宮城県以南の全国各地で栽培されていました(佐々木喬監修『総合作物学第 2 篇の 2(工芸作物篇嗜好料の部、薬用の部)』地球出版、1953 年)。

戦後、山口県が栽培を奨励した理由として、この資料では「最近十二指腸虫保有者が非常に増加しているので、この駆除が重視されるようになり、その適薬として『ヘノポジ油』が脚光を浴びてきたばかりでなく、近くは家畜の寄生虫薬として全国的に需要の増加が予想される状況となった」のをうけて、「国内生産の確保による輸入の防遏<sup>ぼうあつ</sup>と農家収益の増加等」を図るため、と説明されています。つまり、寄生虫病患者の増加を背景に、国産薬用作物の確保と輸入抑制、収益性の高い作物栽培による農家支援を併せて実現する方策として、県はアメリカアリタ草の栽培奨励に乗り出したのです。



▲ナガ製薬の文書に描かれた「アスキス」(出典は資料①と同じ)

なお、薬草栽培には販売先の確保が不可欠です。昭和 26 年 1 月、県は、駆虫薬「アスキス」を製造販売するナガ製薬株式会社(東京都)との間で、県内 300 町歩の契約栽培に関する合意をとりつけました(『防長新聞』昭和 26 年 1 月 17 日付)。「アスキス」の主原料こそが、アメリカアリタ草でした。売買契約は栽培者と同社間で締結するものの、契約書の作成や送付は県が仲介しました。

栽培者からナガ製薬に対しては、採油した取卸油(ヘノポジ油)で納品されました。資料①によれば、全国各地で生産されている取卸油のアスカドール含有量は 45~60% であり、55% 以上であれば 1 kg あたりの取引価格も最高レベル(6,000 円)でした。ナガ製薬と栽培者が交わした契約書では、アスカドール含有量が 55% 以上と定められていたことから、相応の品質が求められたといえます。また、ナガ製薬から支払われる代金の一部は、「アスキス」を以て決済することも契約事項に含まれました。つまり、アメリカアリタ草の栽培によって、現金収入を得られる上に、多くの人が必要としていた駆虫薬を自給自足することもできたのです。

## ②「アメリカアリタ草、の栽培 = 農家の副業として有利な薬草 = 」/『県政展望』No.49/昭和 27 年(1952) 2 月 (行政資料 50 知事公室 7)



アメリカアリタ草の栽培上の特徴について、山口県薬務課はこの資料で次のように述べています。

発芽当時の発育は甚だおそいが、これに反し苗が五寸以上になると急激に伸長する植物ですから、幼稚な時代の除草は入念に行い、その後は二回ぐらゐに行い一尺ぐらいになつてからは除草の必要はありません。中耕も雑草の繁茂状態を見て一、二回行う程度で、陸稲や他の農作物に比し除草の手間が省けるので管理も簡単です。

さらに、栽培に適した環境については、次のように述べています。

既存農家が労働力不足のために、稲作期間中に管理の見易い作物を比較的瘠地を利用して収益を挙げたい場合、又開拓農家が未熟の畑地に栽培する作物としてお勧め出来る薬草です。

こうした特徴を活かし得ると考えられたのは、山間部で高冷地の多い開拓農家や、労働力不足の農家、休閑地・荒蕪地での栽培でした。

昭和 27 年度からの本格栽培を前に、徳山市(現周南市)や阿武郡嘉年村・徳佐村(現山口市)の開拓地では試作が行われました。以下の表は、大和開拓農業協同組合(周南市大島)における昭和 26 年 5 月時点の工芸作物栽培状況を示しています。試作段階とはいえ、同組合が他の工芸作物と同等の規模でアメリカアリタ草の栽培を行い、武田薬品工業株式会社(昭和 21 年に光工場が開設)に取卸油を販売していたことが分かります。

【表】開拓地工芸作物栽培状況調査票

組合名：大和開拓農業協同組合 所在地：徳山市大字大島

組合戸数：34戸 耕地面積：280反 調査年月日：昭和26年5月23日

作物名	栽培戸数(戸)	栽培面積(反)	反当収量	出荷方式	販売先	販売価格(円)
ごま	32	2	5斗	組合	青物市場	1升270
菜種	8	7	10斗	組合	小売店	1升360
落花生	20	6.3	8斗	組合	小売店	1升250
大豆	25	7.2	9斗	組合	小売店	1升160
とろろあおい	30	8.9	200貫	組合	製造会社	1貫目70
こんにゃくいも	10	0.7	210貫	組合	こんにゃく製造会社	1貫目240
除虫菊	13	5	150貫	組合	製薬会社	1貫目300
薄荷	2	0.3	150貫	組合	増植中	—
アメリカアリタ草	30	7	200貫	組合	武田製薬	1貫目250
とうがらし	25	5	生73貫	組合	青物市場	1貫目270
糸瓜	15	1	120貫	組合	小間物屋・薬局	1貫目300
苺	23	4	350貫	組合	青物市場	1貫目250

出典：「開拓と営農」(戦後A農林部750)中の表を一部加工して作成。

昭和 27 年、山口県は厚狭郡・阿武郡・美祢郡内の開拓地を中心に栽培地を割り当てました。栽培開始にあたっては、栽培方法を示すパンフレットと種子(ナガ製薬などから県が購入し無償配付)をセットで栽培地に送りました。昭和 27 年度の収穫状況について、『防長新聞』は次のように報じています。

駆虫薬ヘノポジ油の原料アメリカアリタ草は、県薬務課の指導で阿武、厚狭、美祢郡の開拓地を中心に栽培したが、阿武郡徳佐村を除く他地区ではほとんどがはじめての試作だけに、本年度当初栽培面積二十二町歩にたいし、実収面積はおよそ八町歩三六%にとどまった。しかし地区によっては予想以上の収穫をあげており、阿武郡嘉年村では反平均収油量二・〇七キロで一萬二千四百二十円、はじめて栽培した美祢郡共和、別府村でも最高二キロ、一萬三千円の収穫があつた(中略)明年度は栽培地をさらに拡張、阿武郡九町四反歩、美祢郡十町歩、厚狭郡三町六反歩、熊毛郡十町歩、玖珂郡七町歩、計四十町歩の栽培計画をたてている。

(『防長新聞』昭和 27 年 11 月 28 日付「実収面積 36% 試作のアメリカアリタ草」)

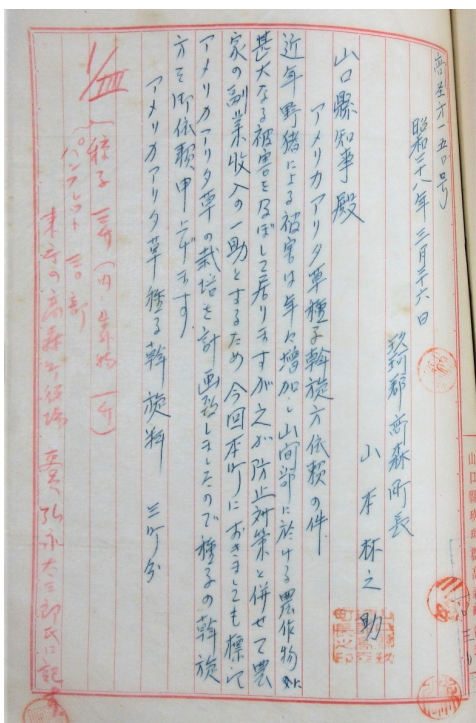
こうした「予想以上の収穫」に関する記事は、この頃、様々な新聞に掲載されました。『西日本新聞』における同様の記事(「農家副業に登場 サントニン薬草 まず反当 15 万円か」昭和 28 年 6 月 21 日付)を読んだ阿武郡須佐町(現萩市)の男性からは、県薬務課に対し「本月二十一日付の西日本新聞で見ましたが、サントニン薬草とかマクニン原料のアメリカアリタ草とか言ふ薬草を植・栽培致して見たいと思つて居りますが、種子か苗か存じませんが何分の御世話方を御願ひ致します」との手紙が送られました。アメリカアリタ草を含む薬用植物の栽培が、メディアや県民から高い関心を寄せられていたことが分かります。



なお、薬用植物の栽培については、山口県が昭和 25 年から進めていた農村新生運動(昭和 27 年から農山漁村新生運動)の一環として位置付けられていたことに加えて、政府の方針とも合致するところでした。厚生省薬務局は、昭和 28 年に生薬の生産消費状況に関する実態調査を実施していますが、その目的は「国としても薬用資源を開発し、優良生薬の生産を助長するため、栽培採取に関する指導対策を確立する必要がある」ためでした(厚生省薬務局「昭和二十八年生薬の生産消費状況並びに昭和二十九年薬用植物栽培計画調査について」昭和 28 年 12 月 10 日付/出典は資料①と同じ)。山口県におけるアメリカアリタ草栽培は、政府のこうした方針にも基づき推奨されたのです。

### ③アメリカアリタ草によるイノシシ対策/昭和 28 年(1953)

(「薬用植物栽培採集一件綴」県庁戦後 A 衛生部 147)



この資料は、昭和 28 年 3 月、玖珂郡高森町(現岩国市)から山口県に対してアメリカアリタ草の種子斡旋を依頼した文書であり、次のように書かれています。

#### アメリカアリタ草種子斡旋方依頼の件

近年、野猪による被害は年々増加し山間部に於ける農作物に甚大なる被害を及ぼして居りますが、之が防止対策と併せて農家の副業収入の一助とするため、今回本町におきましても標記アメリカアリタ草の栽培を計画致しましたので、種子の斡旋方を御依頼申し上げます。

同町では、昭和 24 年頃から川上・明見谷地区などで 500 頭余りのイノシシが出没し、農作物への大きな食害(300 万円相当)が生じていました。そこで、アメリカアリタ草の独特の臭気をイノシシが嫌うことに着目し、栽培を始めることになったのです(『中国新聞』昭和 28 年 4 月 3 日付)。

アメリカアリタ草のこうした活用目的による栽培は、阿武郡須佐町(現萩市)や徳山市など、県内他地域でも行われました。徳山市は「農作物を殆ど収穫皆無の状態に喰荒しその損害は誠に甚大にして、これがため山間部田畑の耕作は放棄される現状」の打開策として、計 6 反の栽培を計画しました(徳山市「アメリカアリタ草種子配付申請について」昭和 29 年 3 月 10 日付/出典は本資料と同じ)。

同様の目的で栽培を計画した熊本県は、栽培の実情や収穫成績、種子の価格、分譲可能な種苗の有無などを山口県に照会しています。その文書の冒頭には「貴県において相当面積栽培され研究されているようですが」との一文があり、山口県がアメリカアリタ草の栽培先進地として認識されていたことが窺えます(熊本県経済部「アメリカアリタ草について」/昭和 29 年 3 月 3 日付/出典は本資料と同じ)。